

『清談青砥刃味』 解題・翻刻・影印

佐藤 悟

解題

一 書誌

体裁 中本。上下二卷（各卷二冊）

大きさ 縦十七・八糎・横十一・九糎

丁数 二十丁

外題 「清談青砥刃味」
せいだんあそこのきれあぢ

見返し題 上巻「清談青砥刃味」
せいだんあそこのきれあぢ

下巻「清談青砥せいだんあをとのきれあじのきれあぢ」

作者 和堂珍海（上巻見返し）・兼吉（20ウ）

画工 松治郎（20ウ） 一勇斎国芳（上巻見返し、歌川国芳が画いたのは摺付表紙と見返しのみ）

刊年 弘化四年

序年記 弘化四年正月

改印 なし

板元 未詳

筆耕 未詳

彫工 未詳

袋 「清談青砥せいだんあをとのきれあじ刃味」「未春新板」と記す。

底本 佐藤悟所蔵本

備考 奥目録の代りに東花堂の化粧品に関する広告を付す。

また後編が巻末に予告されていたが、板行された形跡は見あたらない。

本書の諸本に関しては、他に個人蔵が一本あり、また別本に松村明旧蔵本があったことが知られている。

二 先行研究について

作者として「和堂珍海」「兼吉」の名が記されているが、これは仮名垣魯文の改号前の戯名と本名である。本書は魯文

の処女作であるにもかかわらず、先行研究ではほとんど取上げられることがなかった。それは本書の伝存がきわめて少なく、図書館等に所蔵されることがなかったことによるものである。

魯文の伝記研究の基礎である野崎左文『かな反古』（仮名垣文三発行、一八九五年）には次のように記す。

天保十四年魯文は露蘭、守一、香以等の勧めに由り当時の狂言作者にして傍ら戯作を業とする花笠魯介の門に入りて戯号を和堂珍海と号し初めて一編の戯文を綴りて師の添削を乞ひ又

十五歳の時はじめて戯文を作りて

砂はらに蚯蚓のたくる暑さかな

和堂珍海

の句あり（中略）其翌年弘化元年和堂珍海を改めて英魯文と号し同年『政談青砥碑』と題せし読切の草双紙を著せり是れ魯文の戯作が上梓して世に出でたる初めなり

山口豊子「假名垣魯文」（『近代文学研究叢書』2所収、昭和女子大学、一九六六年）には次のようにある。

天保十四年（一八四三）露蘭、守一、香以等の勧めにより、狂言作者で戯作者、花笠魯介（号文京または李園）の門に入り和堂珍海と戯号、一編の戯文を綴って師の添削を乞ひ、次の一句をなした。

十五歳の時はじめて戯文を作りて

砂はらに蚯蚓のたくる暑さかな

翌弘化元年（一八四四）師の名、魯介（文京）の各一字を併して、英魯文と改名。処女作『政談青砥碑』（読切の草双紙）を刊行した。

平塚良宣『假名垣魯文』（講談社出版サービスセンター、一九七九年）には本書について言及がなく、山口豊子作成の年表を引用するのみである。

興津要『仮名垣魯文―文明開化の戯作者―』（有隣堂、一九九三年）は次のように記す。

天保十四年、庫七は子之介や露蔭や守一のすすめで、狂言作者で、戯作も執筆する花笠文京の門に入り、戯号を和堂珍海と称した。

〈中略〉

弘化元年（一八四四）になると、庫七は、和堂珍海から英魯文と改号し、処女作の『政談青砥碑』と題せる読み切りの草双紙を執筆した。

これらの記述はすべて『かな反古』によったもので、それ以上の新見は見いだせない。したがってこれ以降では『かな反古』のみを問題にすることにする。

これ以外では鈴木重三「三七全伝南柯夢」解題・鈴木付記（『馬琴中編読本集成』第七巻、汲古書院、一九九七年）の中で、本書が「青砥稿」の正本写であることを指摘している。序文に「一日僕青砥の俳優に忽ち感あり。彼本文に依らんとすれども。滑川の深くも不搜纔に六文ならぬ。三文の智恵もなくて。この稗史を編む。」といい、巻末に「この後の狂言は後編にお目に掛けます」とあることから、それは明らかである。

三 「青砥稿」について

正本写は劇場で上演された歌舞伎を草双紙の上で再現した作品である。上演された筋を忠実になぞり、登場人物の顔も役者似顔絵を用いたり、舞台機構を見せたりするのが普通である。そのため『清談青砥刃味』の考察をするには「青砥稿」について知る必要がある。ただし『清談青砥刃味』は天保改革の影響で、役者の似顔を用いず、舞台機構も見せていない。

「青砥稿」は弘化三年七月二十七日より江戸市村座で上演された。絵本番付には八月一日よりとある。四代目中村歌右衛門が蚕屋善吉・名草劇斎・青砥藤網の三役を演じ、他に十二代目市村羽左衛門、坂東しうか、藤川花友などが出演した。辻番付には「青砥稿〈あをとざうし〉」という外題の上に「三七全伝南柯夢新刻刀筆鸞水新語左衛門藤網摸稜・曲亭馬琴著述其俣拙筆綴合廿五段統画本」というカタリがある。これは曲亭馬琴の読本『三七全伝南柯夢』（文化五年刊）『青砥藤網摸稜案』後集（文化九年刊）と櫟亭琴魚作・曲亭馬琴修補の読本『刀筆青砥石文』（文政三年刊）を綯い交ぜにして作られたということを示している。事実、辻番付の挿絵の多くは、この三作の挿絵に多くを拠り、実際の上演内容とはかなり隔たりがある。

辻番付に曲亭馬琴の名を使用したことは孫の興邦にとつて不都合であると考える馬琴によつて直ちに問題とされた。『著作堂雜記抄』には次のような記事がある。

○丙午秋八月上旬、猿若町二丁目市村座にて、吾旧の読本三七全伝南柯夢青砥藤網摸稜案并に刀筆青砥碑一名則刀筆鸞水新語、この三部の読本を一狂言にとり組て興行すと聞えしかば、其狂言番附を見るに、名代は右の三部の書名を並書して、青砥冊子と題し、その傍に曲亭馬琴子の著述を其俣、拙き筆に綴合せし絵入読本二十五段統とあり、此狂言作者は二代目桜田治助、はじめは篠田金次といひし者立作りにて、本屋新七藤本吉兵衛是也、此狂言貝屋善吉青砥藤網葉草外斎三役は中村歌右衛門、赤根半七に市村家橘、お六に藤川花友、三勝に坂東しうか、赤根半六に中村芝十郎、盲人丹波市に三桝梅舎など見えたり。此余は枚挙に遑あらず、此狂言三部の読本に世界を一幕づ、打交て見する故に、原本を見ざる看官に解しがたく分らざれども、殊に時好に称ひしに、日毎に繁昌して、三四十日の間は、二三日以前より約束せざれば棧敷を得難しと聞えたり、然るに吾名号を無沙汰に狂言名代看板に載る事は有間敷に、叨に素人の名号を書載たるは僻言也、吾戲作は内職にて面正しくもなきわざなれば、厳しく障りをいひつかはすべくもあ

らず、いかにすべきと思ふ裡に、丁字屋平兵衛來訪せしかば、吾等此義を談じて、猿若町二丁目の名主村松源六に告て、吾等名号を削らせらるべしといひしに、丁平其身懇意のさるわか町なる茶屋に談じたれど埒明ざれば、丁字屋懇意の町同心の隠居某を頼みて、市村座帳元某方に申出しつ、則右の趣を示談しぬる故に、一義に承服して名代看板に、曲亭馬琴子の五文字を近來高名家と書改め、狂言番附も右の如く入木直し、たりと聞えたり、文化年間市村座にて春狂言の二番目に、八百屋於七物語といふ新狂言を出しける時、京伝と吾等が名号を借用致度由にて、座元より申來りしに、其頃は吾等元飯田町に在り、今の身分と異なれば、則其意に任せたり、是によりて二番目の狂言名代を京伝子の滑稽曲亭子の筆勢八百屋お七物語と題したり、然るに其狂言させる評判もなく、久しからずして亦別の狂言になりたりと聞にき、かゝる例もあるに、こたび市村座にて恣に吾名号を渡世の飾にしぬる事、誠に沙汰の涯り也、興邦の爲に宜しからざれば、右の如くに計ひたり、是只戯名の罪なるべし、右の青砥さうしは、十月下旬顔見世前迄相續したり、其間九月中旬より六歌仙の新浄瑠理を一幕出し添へ、亦十月上旬より源平布引滝の浄瑠理狂言一幕を添たり、只是のみ、右にいへる昔年八百屋お七物語といふ狂言の作者は河竹文次にて、後に二代目瀬川如阜になりし者なり、皆是無益の説話なれども、しばらく遺忘に備へ、且は其崖略を記すのみ、右にしるせし青砥さうし名代看板一義につき、何者歟読たりけん落頌あり、そのうたに云、桜田は青砥不実な摸稜案馬琴の責にあたり狂言、此歌はやく市村座の楽屋へも聞えて、俳優等絶倒したりといふ、書肆文溪堂が話なり、或は云、右の歌は画工英泉の手より出たりと、他が口ずさみたるならん、丙午十月五日
聞く所なり、

「狂言番付」の変更は役割番付のカタリには

曲亭馬琴著述其俣拙筆綴合廿五段統画入本

とあるものと、「曲亭馬琴」を「近來銘家」と入木によって直したものの二種が見られるので、馬琴の記述が裏付けられ

る。こんな事件もあって、馬琴の記述のように「青砥稿」の評判は枚敷の入手が難しいなど、きわめて高かったものと思われる。魯文の序文にもそのことを記している。

最初の絵本番付、台帳その他によって全体の構成を記すと次のようになる。

発端

半六が楠を切った際、誤って丹波市が死に、その娘おさんが半六の子半七の許嫁となる。

序幕

半六は笠屋平三郎におさんを殺すように頼み、熊に化けた平三郎はおさんを自分の娘として連れ去る。家老蟻松典膳は宝田曾太夫を射殺し、御家の系図を奪う。

二幕目

義次郎仇討ちに出自。文字石は観音堂で謎の男と契る。半七は典膳娘園花と結婚する。半七は武芸を試され、若殿吉若君の傅役として鎌倉に下り、密かに北辰の尊像を詮議する。江州二夫川の百姓善吉は鎌倉に下る途中、木曾街道妻籠宿の娘お六に出会い、その孝行ぶりに感心する。

三幕目

吉若君遊興。遊廓に勤めた善吉は主人白まゆの長に勤めぶりを認められ、大金を与えられ帰郷。医者劇齋はおれきを妾に抱える。全八郎、長九郎は舞子三勝を誘拐、半七は三勝を殺そうとするが、おさんであることを知り、娘おづを伴い鎌倉を立ち退く。

四幕目

護摩の灰、宇太郎につきまとわれた善吉は野上の宿にいたお六に助けられる。その宿で、半七は病のため切腹しようとして、おづに書置きを唄にして教える。そこに平三郎が現われ、三勝と再会する。御家の重役新十郎は買い戻した北辰の尊像を半七に与える。尊像の奇特によって病も全快する。

同返し

「邯鄲」。宇太郎から逃れた善吉は山中の古社で公家姿で野路の玉川を歩むが太陽が二つ昇り、川の氷が溶けて落ちる夢をみる。(常磐津浄瑠璃)

五幕目

善吉は従兄弟の昌九郎との妻のおうしにだまされて金を奪われるが、お六に助けられ、二人を許し、お六

と結婚する。義次郎がおれきに出会う。小藤は宇太郎に拐かされ、昌九郎が誤って小藤と宇太郎を殺す。馮二と伯母おそやは二人の死骸を昌九郎とおうしに見せかけ、善吉は犯人として捕らえられる。

六幕目 青砥藤綱の裁きにより、善吉の無実と犯人が明らかになり、宇太郎はおうしの兄、小藤は馮二の娘であることが判る。

七幕目 劇齋の出立と、義次郎がおさじを使っておれきに接近する。

八幕目 義次郎が墓場で陥れられる。

最初の辻番付によれば、「邯鄲」の場合は八月十九日より上演されたようである。

二番目の絵本番付では四幕目返しの「邯鄲」と七幕目、八幕目がなくなり、六幕目のあとの大切に所作事の「六歌仙」が上演される。二番目の辻番付によれば、この上演は九月十三日からの予定であった。そして三番目の辻番付によれば十月二日からは一番目と二番目の間に「源平布引滝」を出している。二番目の辻番付には「後編十三幕」が予告されている。その挿絵や役割から判断すると、名草劇齋の筋であるが、二番目・三番目の絵本番付を見ても上演されなかったようである。これらのことから実際の上演は絵本番付の六幕目までであったと思われる。

「青砥稿」と『清談青砥刃味』の関係を見ると四幕目までという形になり、四幕目の返しである「邯鄲」を口絵で示し、未完に終わった後編への興味を予め繋ぐという構成になっている。

本文に関しては翻刻に示したとおりであり、「青砥稿」を忠実に踏まえている。魯文は後に読本の抄録を多数執筆するが、本作執筆に当たって『三七全伝南柯夢』『青砥藤綱摸稜案』『刀筆青砥石文』を読み込んだという形跡は見られない。文体も次に示したように「故」で繋いでいくという説明的なものであり、この本文自身から文学的な香を味わうことは困難である。

善吉生国を出てより、鎌倉の滑川藪屋の内に三年越し奉公なして運に叶ひ、正直正路の恵み故、六十両余りの金を貯めしに、また主人より褒美として五十両の金を貰ひ、その他出入る客などより餞別を貰ひし故、百二十両の金ありけるを、胴巻きに入れしまゝ、明荷の内へいゝみ込み、割り掛けにしたれども、金高の重み故、肩に摺りて見へる故、道にて護摩の灰に付けられ

この部分だけで「故」が四ヶ所見られる。

「青砥稿」の正本写には本書の他に『勸善青砥譚』全八編各編上下四冊がある。この作品は「三七孝貞六義復讐」という角書があり、作者は初編から七編までが藤本藪雀庵斗蚊、八編は松園梅彦で、画工は初編から六編までが三代目歌川豊国、七編が五雲亭貞秀で外題を歌川豊国が、八編は一梅斎芳春が担当している。板元は菊屋幸三郎である。刊年と改印を各編ごとに示すと以下のようになる。

初編	弘化四年	改印	なし
二編	弘化四年	改印	「米良」
三編	弘化四年	改印	「米良」
四編	弘化五年	改印	「村松」「吉村」
五編	弘化五年	改印	「村松」「吉村」
六編	嘉永二年	改印	「村田」「米良」
七編	嘉永四年	改印	なし
八編	嘉永六年	改印	「衣笠」「村田」「子八」

初・四・六編には花笠文京の序があることが注目される。また八編「青砥名譽仁政録」という別名が付けられている。第

三編までが「青砥稿」の正本写しである。

四 『清談青砥刃味』と「青砥稿」、「勸善青砥譚」の挿絵について

『清談青砥刃味』（「清」と略す）の挿絵と絵本番付（「絵」と略す）、『勸善青砥譚』（「勸」と略す）の関係は以下の通りである。

見返し 青砥藤綱、滑川の場。「勸」三編1ウ・2オの口絵。この場面は本文に関係がなく、辻番付にも見られるが、上演されなかったと思われる。青砥藤綱の滑川の説話は人口に膾炙し、『青砥藤綱摸稜案』前集の口絵にも描かれている。

口絵（1ウ・2オ） 「邯鄲」の場。「絵」四幕目返し。「勸」二編8ウ・9オ、10ウ・11オ。『青砥藤綱摸稜案』の挿絵よりは辻番付や絵本番付に近い構図である。

2ウ・3オ 「絵」発端。「勸」初編3ウ・4オ。「絵」・「勸」・辻番付は事故後の様子を描くが、「清」はその前の様子を異時同図法的に描く。

3ウ・4オ 「絵」序幕。「勸」初編4ウ・5オ。『三七全伝南柯夢』卷之二12ウ・13オの構図と似ている。

4ウ・5オ 「絵」序幕。「勸」初編6ウ・7オ。

5ウ 「勸」初編8ウ。

6オ 「勸」初編7ウ・8オ。

6ウ・7オ 「絵」二幕目。「勸」初編8ウ・9オ、9ウ・10オ。

7ウ・8オ 「絵」二幕目。「勸」初編10ウ・11オ。
 8ウ・9オ 「絵」三幕目。「勸」初編12ウ・13オ。辻番付は『三七全伝南柯夢』卷之三14ウ・15オに該当する挿絵であるが、「清」「勸」ともに別構図である。

9ウ・10オ 「勸」初編13ウ・14オ。

10ウ 「絵」三幕目。「勸」初編15ウ・16オ。

11オ

11ウ・12オ 「絵」三幕目。「勸」初編16ウ・17オ。『刀筆青砥石文』卷之二12ウ・13オの構図と似る。

12ウ・13オ

13ウ・14オ 「勸」初編18ウ・19オ。

14ウ・15オ 「絵」三幕目。「勸」二編1ウ・2オ

15ウ・16オ 「勸」二編2ウ・3オ

16ウ・17オ 「絵」四幕目。「勸」二編5ウ・6オ

17ウ・18オ 辻番付の構図に似る。辻番付のこの場面は『青砥藤綱摸稜案』後集卷之二19オと25オの挿絵を合成したものである。

18ウ・19オ 「勸」二編4ウ・5オ。

19ウ・20オ 「勸」二編6ウ・7オ。「清」「勸」ともに辻番付の構図に似る。辻番付の構図は『三七全伝南柯夢』卷之

五9ウ・10オの構図を借りたものである。

20ウ 「絵」四幕目。「勸」二編7ウ・8オ

同じ「青砥稿」の正本写しでありながら、分量的には『清談青砥刃味』は『勸善青砥譚』の三分の二である。また挿絵に絵本番付の影響があまり見られないことも知られる。また『勸善青砥譚』とは共通する挿絵があることも知られる。『青砥藤綱摸稜案』『三七全伝南柯夢』『刀筆青砥石文』の挿絵と比較すると読本挿絵との関係は希薄であるという結論になろう。似ているものもあるが、そもそも「青砥稿」がこの三作に拠った作品であることを考えれば、『清談青砥刃味』と『勸善青砥譚』の挿絵は舞台そのものを写したものと考えるべきであろう。

五 『清談青砥刃味』の出版時期

次に本書が弘化三年のいつ頃に刊行されたかを考察してみたい。刊行月を知るための手がかりとなるのが改印であるが、本書には改印が見られない。『勸善青砥譚』初編にも改印は見られず、両書はほぼ同時期に出版されたものと思われる。弘化四年刊の新刊草双紙で改印が見られないものにはこれら以外に次のようなものが挙げられる。

『百轉福等雀』二編（立亭京楽作、歌川国芳画、喜多屋孫兵衛刊）

『みめより草紙』二編（笠亭仙果作、五風亭貞虎画、山本平吉刊）

これらの草双紙がすべて無届けで刊行されたとは思われず、改印がない理由を考察する必要があるだろう。

弘化三年は天保改革が継続していた時期であり、草双紙や浮世絵は依然として厳しい規制を受けていた。特に役者似顔絵等の使用が難しい時期であった。

弘化三年四月には三代目尾上菊五郎と弟子たちの改名披露の摺物が問題になった。取締り側の結論としては市販するも

のではないという前提で、挿絵は「似顔」とは見えないが、「歌舞妓狂言様の絵柄」なので、挿絵を除き、句集としての出版のみが許された（『市中取締類集』書物錦絵之部第七三件）。

閏五月に改名主の渡辺庄右衛門が歌川国芳の「里す、めねくらの仮宅」と題する錦絵の衣類の紋所に改印の押し方の問題でお咎めを受けている（『市中取締類集』書物錦絵之部第七五件）。

このような状況の下で「青砥稿」の正本写である本書はいつ刊行されたのであろうか。改印が捺されていないことから、本書と『勸善青砥譚』は同じ月に刊行されたと考えてよいと思われる。『勸善青砥譚』二編・三編の改印は「米良」である。岩切友里子「天保改革と浮世絵」（『浮世絵芸術』百四十三号（国際浮世絵学会、二〇〇二年三月））によれば弘化三年の五月から十一月までの改印と名主名は次の通りである。

五月	「渡」	渡邊庄右衛門
閏五月	「普」	普勝伊兵衛
六月	「吉村」	吉村源太郎
七月	「村松」	村松源六
八月	「濱」	濱弥兵衛
九月	「衣笠」	衣笠房次郎
十月	「村」あるいは「村田」	村田佐兵衛
十一月	「米良」	米良太一郎

これらから『勸善青砥譚』初編が改を受けた時期は弘化三年十月前後と考えるべきであり、本書もその頃の改と見るべきであろう。この時期になると取締りが一時緩和され、歌舞伎関係の出版物である本書のような作品の刊行が可能となった

のであろう。しかし本書には似顔絵は全く使われていない。『勸善青砥譚』初編は青砥藤網などが四代目中村歌右衛門の面影を伝える挿絵であるが、ごく一部に限られている。読本の合巻化という形を取りながら刊行されたのがこの二種の正本写であったと思われる。

六 残された問題点

これまでの考察からいくつかの問題点が浮かび上がってくる。

第一は『清談青砥刃味』の刊年と書名が『かな反古』と異なっていることである。本書は序文の年記や内容から弘化三年中の執筆であることは明らかである。ところが『かな反古』は魯文の処女作を弘化元年刊『政談青砥碑』とする。『清談青砥刃味』の作者も和堂珍海であり、『政談青砥碑』が『清談青砥刃味』であることはほぼ確実であると思われる。このような間違いが起きた原因として、野崎左文が本書を実見せず、伝聞で記したため、安政四年（一八五七）十二月の改印を持つ鈍亭主人（魯文）作『大日坊青砥政談』や読本『刀筆青砥石文』、弘化五年に刊行された草双紙『青陽石廳礎』初編（一筆庵主人作、三代目歌川豊国画）などと混同した可能性を考えるべきであろう。

第二は魯文が花笠文京に入門した時期が天保十四年であったのかということである。処女作であるにもかかわらず、序文は自序であり、文京が校閲した形跡も見あたらないからである。文京は競合作である『勸善青砥譚』に序文を記し、その代作者の可能性すらある。また魯文は「英魯文」という戯名を貰った筈なのに、「和堂珍海」という戯名を使用している。文京との師弟関係を示すものがない以上、文京に入門した時期はもつと下ることになる。あるいは嘉永元年に入門し、その披露が行なわれたのが嘉永二年刊『名聞面赤本』と考えるべきであろうか。

第三は「和堂珍海」という戯名のほかに、「兼吉」という本名を記していることである。画工についても同様で、「松治郎」と記されている。「松治郎」は外題表紙）を描いた歌川国芳とは別人で、正体不明の画工としかいいようがない。本名を記すということは、天保十三年六月三日に出された出版にかかわる町触の中の「何書物ニよらず新板之物作者并板元之实名奥書ニ為致可申事」という条項によったものであろうか。この条項により天保十四年の新刊には、戯名の「為永春水」ではなく「教訓舎長次郎」と記されるようなことになった。この表記のあり方は弘化三年の時点では本書以外に見いだすことができない。この实名表記の問題にも見られるように、素人的な作品であり、文京の関与を見いだすことは難しい。

第四は通常、板元名が明記される袋、表紙、見返し等に板元名が一切見えないことである。東花堂という御白粉製所（化粧品店）の広告が上下巻の裏表紙見返しにあるのみである。このことから本書が東花堂を金主として出された入銀本、もしくは景物本であることを意味するのも知れない。しかし無名の魯文を景物本に起用することは考えにくいことであり、さらなる調査が必要である。

以上のことを今後の課題として擱筆することにする。

翻刻

【凡例】

- 序文（1オ）と口絵（1ウ・2オ）はふりがなが振ってあるのでそのまま翻刻した。
- 本文はほとんど平仮名であるので、適宜漢字を宛て、句読点を施した。漢字にはもとの本文をふりがなとしてそのまま

用いた。本文の漢字はそのまま記した。

○仮名遣い等は原文のままとした。

丁移りの つゞき 次へ は省略した。

【本文】

清談青砥刃味 （上巻表紙）
せいだんあをとのきれあぢ

弘化四丁未春新板

清談青砥刃味
せいだんあをとのきれあぢ

和堂珍海作

一勇斎国芳画

（上巻見返し）

あるひやつがれあをと わざをき たちま かん
一日僕青砥の俳優に忽ち感あり。彼本文に依らんとすれども。滑川の深くも不搜。纔に六文ならぬ。三文の智慧もなく
て。この稗史を編む。百貫の松明は照すとも。何ぞ和漢の書にあかるき事を得む。劇斎が隠悪。善吉が善行。ともに
くわんちやう 勧懲ならざるはなし。見る者あかね半七と。於六櫛の齒の引もきらず。漸にして割込の土間に入りて。覗く事を得たり。
しかれども。小腕も鈍きなまくら鋼。争か青砥にかけて研事あらむ。只藤綱の名に因み。繁きを摘余れる苟。其條々から
み付たる幹を助けて培ふも花咲春を待になん
つぎ たす はなさくはる まつ

弘化四丁未孟春新鑄

和堂山人(印) (一才)

二夫川の善吉道に賊難をさけんと山中の古社に一夜をあかし怪き夢を見る (一ウ・二オ)

大和の国米谷山に年ふる楠の大樹ありしを、所の領主、続井順昭殿の仰せによりて、佐保の莊の杣を多くつどへ、伐り出さんと、手を揃へ、足場を掛けて手斧始したれども、いかな事にや、斧を入るれば、俄に大風吹き起り、木の葉落としに大勢の杣の人々手足を挫き、傷を蒙る者少なからず。これはまつたく年ふりし木霊の祟り、また山神の妨ぐるものならんと、人々懼れ、それよりは誰あつてその楠を伐らんとする者なきところに、同じ佐保の莊のその内に、茜半六といふ杣人がこともなげに請け合つて、五日の内に伐り出し、材木となして、領主へ差し上げんと申す故、女房お浪、倅半七、先日も大勢の仲間の人が身に禍ありしを知りつ、その木を伐りて山神木霊の祟りを受け、後の禍となる時は、一人の倅半七の生ひ先のため悪事止まり給へと、勧むる故、半六女房にいひけるは、先日初めこの楠へ斧を入れしその時に、われも人夫に雇はれて、疾風に吹き落されしが、熊笹の内に落ちし故、身内に少しの傷もなく、氣絶せしのみなりしが、夜露が口に入りしか、しばらくありて心付き、見るに辺りで語らふ者ありて、人かと見れば人ならず、これ三輪山の松の精と楠の木の精が現はれて、「いかほど木精の通力ありても、暮目をもつて木霊を鎮め、鹿尾菜の煮汁を根へ注げば、自づと朽ちると話し合ふを聞いたる故に、かくの如くせし上は、禍もなく、今に首尾よく仕あふせて、女房倅にも樂をさせんと、諫めを聞かねば詮方なく、妻のお浪に半七は身の禍を逃る、様と、山神の宮へ詣でける。半六は梢に上がり、段々枝を下るところへ、丹波市といへる座頭、娘お三に手を引かれ、都を指して上るとて、この山道へ差し掛かり、木

のもとに休らふうちに、半六が梢にて使ひし斧が、柄元より「ウ・ウ・ウ」はつしと折れて、丹波市が肩を深く手を負はせ、驚き慌てて介抱すれば、女房お浪半七も立ち返り来て、共々に呼び活けれども、かなわぬ深手、座頭はやうく声をあげ、我等事は丹波太郎という武士の果て、浪人して夫婦別れ、そのうち眼病にて目盲となり、糸竹のかすかな世渡り。娘お三の母親を慕ふ故、一度は逢はせんと、都へ上ると、今際の際。行方の知れぬ山路に来て、斧に撃たれ死ぬも因縁。娘を頼むとしがみつく。半六夫婦も涙に暮れ、袖を浸しつ、半七とお三夫婦の契約して、丹波市ありあふ腰に下げたる水筒にて祝言のまなびをすれば、丹波市も今際の喜び。死に行く親より娘は幸せ、目界は見へねど、音声にて容顔美麗は推量せり。一ト目見たやといふまゝに、この世の息は絶へにけり。

○これより半六夫婦の者は丹波市が亡骸を厚く葬り、お三を娘と養育して、行くくは半七に娶せんと、大事かけて育てけり。

○桶の木を伐り出し、続井殿へ差し上げ、褒美として多分の知行を給はりて、半六は武士に取り立てられ、何不足なき身となりて、それより月日も三歳を過ぎ、母のお浪はふとしたる病重りて身罷りぬ。その時、半七は十七歳、お三も十六歳にぞありける。また一ト歳を越して一ツ周忌の寺参り、父半六も同道にて東大寺へぞ詣でける。

○大仏前に名高きは熊の平三が膏薬店。買手も多き生業のそれく薬を具に詰め、又は竹皮に巻き込みて、人々に渡しつゝ、弁当を遣ひある折から、西半六、平三を呼び、折り入つてその方へ頼みたき一儀あり。すなはち頼みの印なりと、小判で五兩、平三に渡せば「たとへ卑しい生業でも、五兩の金に目がくれて、悪事に荷担は仕らずと、金を返せば半六が無礼至極と切り付けるを、平三は悪びれず、随分頼みの様子により、金銀づくに致さずとも、頼まれませうと男気を半六も感心して、所持の小柄を平三にとらせ、何か密事を頼みける。○半七お三はこの程より、定まる夫婦と思ふものから、互いに二八の年頃より、人目を忍びて逢ひ染めしが、嬉しき逢瀬の度重なりて、たゞならぬ身となりける。二人は母の

寺に詣で、墓に水を供へつゝ、お三は半七にうち向かひ、この程家老の蟻松より、父上の方へ言い来たりしは、娘御の園花をあなたの嫁にあげたいと言ふを、父上も聞きいつてか、内に養ふあのお三は半七の許嫁なぞと申訳でなし。このこと倅に言ひ聞かせ、いづれ返事を致そふと、仰つてお遣りなされしは、心に掛るとかこつにぞ、半七お三を慰めて、なか／＼左様な事あらふ。(3ウ・4オ) たとへ父の仰せもせよ、二人は親親が許嫁。もし約束を變しする時は丹波市殿へ義理立、すと、二人は語らふその折から、いつれより一ツの荒熊、暴れ来たつて、驚くお三を引つ攫ふて駆け出すを、半七跡を追つかけて、立ちかゝる折、半六がこゝへ来たりて、しばしと止め、熊は日本の猛獸故、大力無双の者たりとも、なか／＼これに勝つ事能はず。この上は領内の狩人を呼び集め、獸狩り致さんと、半七を急がせつゝ、共に宿所へ帰りける。お三は熊に攫はれて、岩屋谷の山深く至りし頃に引き降ろされ、啄まれるよと驚けば、荒熊と見へたるは、皮を被ぎし人なる故、確かに盜賊、拐かしとます／＼お三が仰天せしを、皮を被ぎし男いふ様、全く盜賊などではなし。熊の平三といふ者なり。こなたの父御か欲に迷ひ、家老の娘を半七の嫁に取り、おのれも家老職にならん巧み。熊と姿を變へし上、密かに殺しくれよとの頼み。もし承引せずはわなみを殺すとおる故に、抱ん所なくかくの仕合せ。証拠といふはこの小柄と、お三に見せれば驚きて、身の上を打ち明けて平三に言ひける故、不憫の事と思ひければ、これよりお三を娘として身の生業は、兼ねてより習ひ伝えし俳優の舞を渡世と支度して、鎌倉へこそ退きける。

○続井の老臣蟻松典膳、宝田曾太夫を手の者に言ひ付け、殺さんと謀りしが、なか／＼手強く働く故、木陰より二ツ玉に撃ち留め、持ち来たりし続井家の系図を持つて立退きけり。(4ウ・5オ)

○さるほどに、半七はそれより数多の年を経て、廿四歳になりける。お三が熊に攫はれてより、半六が勧めに是非なく蟻松典膳が娘園花を呼び迎へれど、お三の生死いなや知れざるその内は、義理立たざれば、表向き夫婦といふは名ばかりにて、一所寝もせざる故、園花これを怨みしかば、お三が熊に攫はれし事、また丹波市今際の際に夫婦の約束したる

故、丹波市に對しては、いはゞ親の半六は敵ともいはるゝ身、その恨みを宥めん爲の約束故、義理が立たずと、一部始終を聞きしより、さほどの事と知らぬ故、とうぞあなたの女房と言はれんものと、恋ひ初めしが、今は結句思ひの種、さはいへこのまゝ、親里へ戻るは女の道ならず。お三様の行く末の安否知るゝそれまでは、腰元水仕となしてなど、お側に置いて給はれと、一ツ旦嫁したる男の家と、戻らざる貞節を感じ、表向き妻と呼びつゝ、日を送りぬ。

○鎌倉雪の下に文字石といふ女あり。呂図吉とて色好みの男、たびゝ言い寄るといへとも、聞き入れず。大磯の廓に文字石に似たる女有て通ひ、なほゝ上り詰めたりしが、いつか多分の負目を拵へ、方々へ義理悪しく、いつそ死なねばならぬと言へば、文字石が言ふ様は、世に似た事もあるものかな。まゝ、しき親が厳しくて、所詮永らへあるとても、何樂しまん縁もなしと言ふを、(5ウ・6オ)これそ幸ひと心心を連れ立つて、心中に出でけるが、道にて追手に見つけられ、呂図吉は鼻柱打ち拉しがれとふがゝとやうを、大勢折り重なり、天井持ちに掻き上げて、雪の下へ連れ行きける。○文字石は追手の者を避けんがために辻堂へ木隠れしたるその内に、闇はあやなく黒小袖の浪人者が忍びゐて、ものをも言はず文字石を手籠めにせんとせし故に、声を立つれば表は追手、抛ん所なく辻堂に仇なる契り結びける。

○茜半七都在番にて、吉稚君が御不例中、俄に御前へ召し出され、御氣鬱散じのためなりとて、並み居る近習の若侍木太刀をもつて半七に向かひ、山家に生ひ立つその方なれば、武芸の程も覚束なし。試しみよとの仰せぞと、手にゝ掛かるを、半七は御奉公なす上は、我が物ならぬ主君の体、いさゝか嗜みこの如くと、木太刀をもつて大勢を相手にしばし立合しが、皆半七に手に足らず、いさこの上はと、重役たる新十郎がたんは槍をしいて掛かるをまた受け止め、秘術を尽くす太刀筋に感心せられ、若殿の御傳役を仰せつけられ、鎌倉へ御保養のために下りめさるゝ御供を許され、その上にかねて紛失なしたりし北辰の尊像を、(6ウ・7オ)御家の系図の詮議をも内意を請けて吉稚君を守護なして、鎌倉へ下りける。

○江州二夫川の貝屋善吉は親の代まで名主役勤めてゐたる家なれど、両親が亡くなりてより、伯父がよからぬ者なる故、田地田畑も人手に渡り、水呑百姓で暮らせしが、以前鎌倉にゐたりける伯母がこの程立帰れば、これを留守に頼みつゝ、ひとまづ鎌倉へ下りし上、奉公なしても金調へ、親の所持せし田畑を買い戻さんと思ひつゝ、近江路を立ち出て、木曾街道の妻籠宿通りかゝりしその時に、宿引きの娘に連れられて、とある宿屋へ来てみれば、見苦しきなれば、善吉興醒め、茶代を置いて立ち出るを、娘が引き留め、あなたが泊まり下されば、親子二人が立ちゆきが出来ますと申すもの。綺麗な家と言ふてお連れ申したはお腹も立たうが、どうぞお泊まり下さる言ふ故、不憚と善吉がこゝに宿りを求めしが、段々娘の話を聞くに、この街道で人に知られし森村屋利五郎とて、脇本陣をせし家も、後添への母の邪険、親父の長の煩ひの看護に倦み果て、残りし着類と少しの有り金を持つてこゝを立退きし故、今に父親煩ふて、奥に打ち臥しをりますと、聞いて善吉身につまされ、袖触り合はすも多生の縁と、僅かの路用のその内より、額銀二ツ取り出して、娘に渡し、親の薬の代になどしてやらしやれと言ひければ、娘は

○この時お六善吉を引き留めし頃、母親の形見の櫛を落とせしを、善吉拾ひてお六に渡し、後に櫛よりして、一ツの物語起りける。(7ウ・8オ)

ひたすら断れども、是非是非と納めてさせ、一夜を明かして、その翌日鎌倉へと急ぎけり。

○鎌倉の滑川、藪屋の座敷にその頃名だ、の舞子の三勝が妹分の小勝、小夏、芸者仲居を入り混しり、続井家の若殿吉稚殿を唆して、とりぐ踊り狂へるは、家老蟻松典膳が言ひつけ越したる全八郎、長九郎の兩人が付き添ふ故の業なるべし。御傳役たる半七は鎌倉へ着せし頃より、水の替りと打ち臥せしに、この程、瘡の病となり、養生のそのために、佐々目が谷の貸座敷に養生してある故に、佝人ともは時を得て、もつけの幸ひと若殿へ淫酒を勧め、名うての舞子三勝を、殿のお伽に致さんと働振に誑し込む、悪の根差しと見へにける。

次の絵解き 廊下を隔てし座敷には、金沢の藩中に井輕源治といふ侍、酔ひ覚めの水吞まんとて、手を拍つところへ仲居

がとふに心利かせて、井へ水を汲みつゝ、来たりし故喜びて、来る度に色々と世話になれば、祝儀をやらんと金入れの内を改めて、この中へ五両の金を入れ置きしが、紛失したのは枕探し。主人に会はんと声立つるを、善吉が驚きて、源治をしばしと言訳して、その金は先刻私か台の物を下げに來たりし時、取り散らしてありし故、起こせ申せど、御酒機嫌良く寝ておいでなさる故、私が仕舞ひおきました。預かりの金多ければ、胴巻の奥になりをりますれば、他の金で御容赦と、五両の金を出して（8ウ・9オ）やれば、源治も今は面目なく、善吉に詫びながら、また一口吞む水は、茶碗よりこぼれしを拭くとて、紙屑のその中より出たる金に心付き、先刻酒に酔ひたる故、水を吞むとて手か定まらず、紙入れへ掛けし故、金入れも濡らせし故、金を出して紙に包みたる迄は、生酔ひ本性違はずと、今考へれば覺へあり。それに何故大枚の金を立替へくれしぞと言へば、善吉、この二階でそのやうな紛失物がありましては、主人の名前に傷がつき、自然とお客様の運びも遠くなるは知れた事、また二階へ立ち入る芸子衆や舞子衆にも傷がつく。三方四方を思ひし故、お客様から貰ひ貯めたや給金のその内から弁へましたと言ふを聞き、源治は赤面、善吉より償ひし五両の金、また自分が失ひしと思つたる五両の金と、双方とも善吉に納めよと言へど、善吉物堅く、私が償ひし金は受け納める法もあれ、大枚のその金をお貰い申す様がないと争ひしを、この程より源治が深く執心せし舞子の小藤が執り成して、今までは源治様も氣心知れぬお方よと、心を疑ひ、肌触れねど、今善吉へ五両の金を遣るといふ氣象に愛で、今日から心に随ひます。それ故、金は取り持ち代と、善吉に勧めつゝ、五両の金を無理矢理に善吉に遣はしける。

○敷屋の主、白眉の長は善吉が実明を立ち聞きして、三年この方、奉公に私無く、（9ウ・10オ）塩増薪に心を付け、神妙に勤めるのみか、商売柄に奉公しながら色にも溺れずをるそなた、とくより暇を願つたを、引き留めるは俺が粗相。これまで預かる給金と祝儀の貰ひ貯めを預かつた五十両余り、またこの金は国元へ僅かなれど土産の金。なくした田地を買

ひ戻し、人に預けてその上で、従姉妹合せの女房があらは同道して、また来やれと、世に慈悲深き主人の言葉。善吉は
 有難涙、何と礼の言葉もなく、袖を浸すぞ道理なり。(10ウ)

薄化粧御顔のくすりおしろい

菊寿香

一包四十八銅

こい化しやう同じくおしろい

八重菊

一包四十八銅

御懷中
 早化粧
 菊寿布

一包銀一匁

御多りおしろい

一袋四十八銅

御化粧下
 艶白菊

一包四十八銅
 一箱壹匁

御薬
 紅菊香
 薄桜

十二銅

御白粉製所
 てりふり町

東花堂製〔福多〕印)

(上巻裏表紙見返し)

清談青砥のきれあぢ

珍海さく

国よし画

(下巻見返し)

読み始め

同じ敷屋の二階座敷、目立たぬ奥の四畳半へ誘ひ連れ立ち、取上げ婆いもりが案内に来る人は、佐々目が谷に名に聞こへし名草劇斎といふ医者が、身代不足なけれども、未だ一人住みなる故、いもりが奨めに手かけをば、抱へさするも山吹色。かねていもりはかゝる世話なして世渡る老婆故、劇斎さほど望みにあらぬを、無理に奨めて連れ来たるに、折よくこゝへ大和なる統井の若殿が遊興故、劇斎はいもりを待ちまはすその間、吉稚殿へ御目見へすれば、付き添ひゐたる今市布施、かねて蟻松典膳と示し合せし事なれば、若殿の御前へは色々劇斎を推挙して、この頃御国で大殿の御病氣、この人の療治を願ひなば、御平癒あるべしと、己らが巧の荷担になさんと、劇斎に本国へ立ち越へ、大殿の御療治致す様にと、ひたすら執り成し頼みける。劇斎は吉稚殿へ御目見へなしつゝ、急々に大和路へ赴きて、大殿の御病氣の療治を請け合ひ、立ち戻る座敷に、(口オ)いもりは酒肴用意なしつゝ、追従たらしく、サア／＼お一つ上がりませ。いつぞやちよつとお話がござりましたが、年が寄ると氣忙しく、年頃といゝ、器量といゝ、お望み通りのがありし故、こゝへ連れて参りましたト言へば、劇斎、何も今日に限つたる事でもなし。とかく男ばかりの暮らしといふものは、物事が行き届かずともじに話するやいな、俄に同道致したと言ひ、今日(けふ)はちと遠慮せねばならぬ御方の座敷へそなたが参りし故、モシひよんなこと申し出しはせまいかと、心配致した。しかし折角同道とあれば、その者を連れてきやれと言ふに、いもりがほと／＼喜び「サア／＼何も恥づかしい事はない。こゝへおいでと手を引いて連れ来たる一人の女、二十歳の上を二ツ三ツ超えた器量に棲はづれ、顔赤めつゝ、下にゐるを、いもりはとかく執持ちて、この子も歳のゆかぬ内から幸せが悪うござりまして、色々苦勞致しました。頼りない身の上で、他に縁は一人もなし。お目を掛けて遣はされませ。しかしまだ決まるか決まりもせぬ内からと、べちや／＼喋れば劇斎が、その方が世話なれば、さして身元を聞くにも及ばぬ。殊更優れし器量といゝ、何は格別、近付きのため、一ツさそふと盃取り上げ呑んで、さしたる盃が飯のいもりの媒酌にて、見交はす顔に恋風が劇斎身に滲み、茫然と見とれる素振りにいもりは執り成し、恥づかしそうに俯くおれきを無理に急がせ、いつの

間にか仲居に言付け廻したる一間の床へ誘いて、割りなき契りを結ばせける。はからず劇齋いもりが世話におれきを抱へ得しその上は、留守を頼むに屈強と、続井の若殿より御頼みにて、大和路へ参る故、暫しの留守を頼むぞと、聞いておれきも本意なげに、世に頼りない身の上、どうぞ情けあるお方の所へ行つて、末々も身の行く先をと、樂しむ甲斐に、あなた様のなにお方のお世話になるは、女冥加、嬉しやと、思ふ甲斐もなく、すぐに大和路へ旅立つとは、よく殿御に縁薄しと、打ち萎れるを劇齋が、「ハテそれも未だ来月の事、たとへ旅に赴くとも、日ならず戻ると言ひなせば、いもりも折から出で来たり、死に別れでもする様に案じ過ごしも程がある。幸ひ明日は日も良ければ、この子を連れて参りますと言ふに劇齋、この方も早いが（「ウ・十二才」）勝手。明日は相待ちをると言ひながら、小判でさりと十兩余り、衣服はこちらへ参つてから、また拵へて遣はすが、何かなしに入用あらん。支度金にと遣はしつゝ、約束なして戻りける。

○吉稚殿の御供して鎌倉へ下りたる茜半七、到着するとその日より心持ち常ならず、当座の事と御前を引き、打ち臥す内にいつとなく、瘡の病に是非なくも、出仕遠慮して、帷子が辻の貸座敷に養生なせしか、やうやくに病全快なせしかば、近日日出仕と思ふ所へ、松倉新十郎訪ね来たり、挨拶終つて言ふ様は、若殿に付添をる布施今市の兩人が、若殿の御入用とて、多分の金を下さ様、手形を以て申送るに、子細あらんと様子を聞くに、若殿には鎌倉へ御下りありて、鬱症の病は御全快あらるれと、三勝といふ白拍子に深く執心ましゝて、それ故多分の金子の入用、甚た御身持ち悪しき事、大殿の御耳に入り、殊の外の御立腹、その方下りで即刻に本国に召し連れよ。手討にせんと厳しき仰せとありし始末を物語れば、半七はうち驚き、拙者はなく、病氣故、存じながらも心に任せず、やうやく全快致せども、さほどの事とは思はざりに、大殿の御憤り、以ての外とある上は、打ち捨ておかれず、何事も身に引き受けて若殿の、御身に恙なき様執り成し頼むと言ひける故、新十郎も感心して、天晴れる貴所の心底見抜きし上は、及ばずなから某も、ともく思慮廻らすも御家のためと、互ひに密事を語らひける。

○いつぞや大和の岩屋谷に熊にいでたち、平三はお三を伴ひ立ち退きしか、それより鎌倉へ下りて後、お三は半七か胤を身籠もりてゐしが、月満ちて女の子を平産なせしを、お通と名付け、里親の方へ預けつゝ、平三は日頃(12ウ・13オ)から身こに覚おぼへたる俳優をお三に教え、女舞を始め、名も三勝と改めしに、時に叶ふて持て囃され、数多の女を抱へつゝ、若宮小路に住居して、心易く世を送りぬ。この頃、滑川の藪屋のもとへ、都より逗留の大家の若殿、三勝を召し仕はんと色々いろくに手だてを以て言ひ入れられど、半七に操を立てて、男嫌ひと言ひ触らし、座敷ばかりを勤めしかば、なほく口説くせき落おとさんと思ふ者もある故にや、あそこよ、こゝと呼び囃され、全盛類なかりけり。○今日は扇谷の某にて、三勝の舞振りを御覧あらんと、かねての言ひ込み、もとよりこれは度々召され、いやらしげなき座敷故、三勝急ぎ支度して、迎ひを待てば、見覚への法被の目印紋付きの箱提灯に道を照らし、夜道故に駕籠を雇ひ、迎ひに参りしと言ふ故に、平三も迎ひの人に三勝が礼を述べ、三勝駕籠にうち乗りて、扇谷へと出で行きける。○しばらくありて平三が門をけはしく叩く故、誰かと見れば昼の程、扇谷から案内して参りし中間、散らし髪かみの裸にて、今方、三勝殿の迎ひに出直して来る道で、頬ほ被りせし二人の侍、我等を捉らへて手籠みに致し、看板法被印ある箱提灯まで取り上げられ、何分屋敷へ戻られず、三勝殿はまだ御内かト、聞いて平三びつくりして、さては今、迎ひに來たりしは騙りなりしと出掛けるを、驚いて引き留める中間を振り切つて、三勝が心掛かり、少しも早くと馳せ行きけり。平三、道にて追付きて、駕籠引き留め、よく見れば、付添ふ二人は長九郎、全八郎なりければ、おのれ騙りめ。三勝をやはか渡さじ。返しおれと言ふを、双方抜き連れて、斬つて掛かるをあしらふ内、全八郎は三勝を猿轡掛けたるを、駕籠より引出し立ち退く所へまた一人、忍びの扮装にて(13ウ・14オ)三勝を引つ攫ひ、逸足出して馳せ行く故、支へる平三抜き合はせ、加勢なしたる駕籠掻き二人を平三は余儀なく仕留め、布施今市の兩人とも、しばらくこゝで挑みあふ内に、三勝攫はれし故、後にて尋ね巡れども、そのうちだんく夜も更けて、尋ね倦むそ道理なり。

○先刻三勝を引つ攫ひ、白狭和越まで来たりしは、別人ならず半七なり。人の往き来も途絶へたる木陰に誘ひ、驚きし三勝に言ひけるは、某か主人の若殿、その方の色香に迷ひ、長々この鎌倉に御逗留、数多の金子を遣ひ捨てられしも、元の起りはその方なれど、あなちそちが咎なりと申すにはなし。さりながら大殿の御怒り強く、若殿の御身の上、既に御首を打ち落とし、本国へ持ち帰れとある故に、さある時には御家のため宜しからず。されはといふてこの保になしおいては、大殿の御怒り納まらず。よつて若殿の罪を身に引き受け、不憫ながらその方を討つて、我もこの場で自殺なし、御用金を遣ひ捨てしも、まつたくは某が三勝が色に迷ひてなせる業、若殿には御存じなしと御帰国をあらせんため、またその方が親元へは、某が同腹たる重役が、汝の一命貰ふため、身の代金を遣はしたり。罪なき者を殺すのも、忠義のためだ、許してくれと、斬らんとすれば、涙ながら三勝が押し止め、それ程にことを訊け、身の代までを親へ送り、忠義故に殺すとはあらは、命はさら／＼惜しみはせねと、命ある内言ひたいこと、一通り聞いて下さりませ。私が父は大和路にて斧に撃たれてあいない最期、その恨みある人に育てられ、小さい時から許嫁の夫の胤を身に宿せば、産み落して(14ウ・15オ)一人に預け、男の肌は触れまじと、男嫌ひを立て通し、舞の渡世で暮らしてゐる、涙の雨の絶へ間なき、笠屋三勝が身の上を、哀れと思し給はれと、その身の上を細々と、聞けば聞くほど半七が、一／＼胸に当りし故、もしやその方、幼き時、お三とはいはざりしかと、言ひつゝ、立ち寄るその折から、雲間を晴れし月影に、顔見合はせて三勝も、そう言ふあなたは半七様かと、嬉しさ余る喜びも、忠義のためとあるからは、私を殺して忠義をば立て、と言ふを、半七がイヤ／＼今まで人の恩を受け、平三とやらいへる人へ、汝を殺さば義理立たず、某さへ若殿の、罪を身に引き受けて、切腹すれば亡き跡をと言ふを三勝止めつゝ、兎に角こゝを落ち延びて、時節を待ちて若殿の、御代となりなば世に出る縁もあらんと、三勝が言葉に半七余儀なくも、死を止まつて思ふ様、都を出るその時に、紛失なしたる御家の系図、また北辰の尊像を、詮議なさでは御内意を、請けたる甲斐なし、兎に角に、一度こゝを落ち延びて、また致し方あるべしと、夜半に紛れて立ち

退きけり。

○善吉生国を出てより、鎌倉の滑川藪屋の内に三年越し奉公なして運に叶ひ、正直正路の恵み故、六十兩余りの金を貯めしに、また主人より褒美として五十兩の金を貰ひ、その他出入る客などより錢別を貰ひし故、百二十兩の金ありけるを、胴巻に入れしまゝ、明荷の内へいゝみ込み、割り掛けにしたれども、金高の重み故、肩に摺りて見へる故、道にて護摩の灰に付けられ、二三日この方付き纏ひしをやうく道を代へ、一人急いで来る道へ、二人の雲介が喧嘩仕掛け、酒手を強請るを旅人が、雲介をなげ散らしてくれ(15ウ・16オ)たを、善吉手を下げて礼を述べつ、顔見れば、以前二三日付き纏ひ、胡散だと思ひし護摩の灰故、そつとすれども詮すべなく、護摩の灰は親切らしく、旅慣れぬ人と見ると、こんなことは道中のありうち、今夜は一ッ緒に泊まらふと、連れ立つ先へ故郷に、はや程近き松山の宿に是非なく泊まりける。

○善吉はいかゞぞして、今宵を無難に過さんと、金を割り掛けの荷より出し、とつおいとする所に、座敷へ出し女を見れば、どこやらで見た様と言へば、女もほんにあなたも見た様に思ひます故、最前より考へてをりました。モシあなたは木曾の妻籠へお泊まりなされたことはなかりしかと、言はれて善吉思ひ出し、成程おまへは妻籠の宿の森村屋の娘御か、どうしてこゝにと尋ねれば、お六は善吉にうち向かひ、三年後に善吉が通りし頃、煩ひぬし父親も、その後病死して、こゝに僅かの知辺の世話で、今は卑しきこの奉公と。訳を語れば善吉も、鎌倉へ奉公して稼ぎ、思ひの外に間拍子よく、よい主人を取り当てて、首尾よく暇を貰ひし故、こゝに百二十兩といふ金を持ちし故にか、今、風呂へ入りに行つた旅人が、無理矢理に連れになり心ならず。一体アノ人は何であらうと言へばお六が、あれはこの道中で悪い事するお方故、中々見込まれた上からは、今宵は無事に過すとも、明日は逃れはあるまいと、言はれて善吉驚き、どうぞしてあいつめを追ひ出し様はあるまいかと言ふ故、お六は思案して、兎角盗人が目を掛けるは金ばかり。その金を私に預けて、一ツ旦こゝを立ち退いて、後にてこゝへ目立たぬ様に取りにごさんすが良からうと言ふに、善吉感心して、成程女に似合はぬ

智恵者。何分頼むと言ひければ、お六は考へ、しかしマア多分の金を私の方から預からうと言ふのもいかゞ、他に仕様もない事かと言ふを善吉、これはしたり、気心を知つたお六殿、たとへ幾ら預けたとて、その疑ひが何あらふぞと言ふ故、お六が左様なら、多くの金を預かる形代、左もなきものではありけれど、いつぞや妻籠でこなさんが、拾ふて下さん（16ウ・17オ）した母さんが形見の櫛。私がためには身にも代へ難き大事の品。これをあなたへあげます故、金受け取りにござんすまで預けますと言ひながら、挿したる櫛を善吉に抜いて渡せば、胴巻の俵にて金をお六へ渡し、もし扨所なきことありて、人伝にて金取りに来るとも、櫛が割符と約束しつ、そのうち以前の護摩の灰、風呂から出て座敷へ来たれば、お六は風呂へ善吉を案内なしつ、その夜も更けて折を見合はせ、裏道をお六が案内。善吉が背戸から抜けて山道にか、り、峠のありし古社へ辿り着きつ、一夜を明かし、明くる日二夫川へ赴きける。

次の絵解き

こ、は松山が母屋に続く木賃泊りのあばら宿に、いつぞや白狹和越より半七は三勝を伴ひて、それより里親の所へ至り、娘お通もそれとなく三勝が連れ来たり、一度都へ上らんと、長の旅路に半七が病に臥して今ははや、身に纏ひたる衣服をも、菓の代に売り払ひ、その日の糧は三勝が、娘お通にも隠しつ、夜は人の軒下にて三味線弾いて門付に、僅かの情けに三人が、命を繋ぐ憂き境涯、見る目哀れな暮らしなる。お通は昼の草臥れに、側に寝たるを幸いと、半七身の上を語りつ、一ツ旦若殿の御傳役、勤めし身にてこの如く、浪々なしてあまつさへ、そなたにまで昔に代はり身にも檻樓を纏はせて、袖乞さする口惜しさ。世にある時、このお通も出生なしなば、御乳や乳母と傳かせんに、綿薄き檻樓布子に八口に移り香残る紅絹の布の赤きを喜び、この様なよいべ、着たと人に吹聴、これが続井の身内にて、一度時めく半七が、なれの果てかと齒を食ひしめ、悲運の涙に暮れければ、三勝色々諫めて、またその様な愚痴なこと、人は七転び八起きとやら、悪い後には良いことが（17ウ・18オ）あらふ程に、氣を強ふ持つてくださんせ。このお通が三味線好きで物覚へのよいにつけ、芸を仕込んでやがてお前にも楽をさせませう。世に武士の身の上ほど危うきものはござんせぬ。

いつそ侍やめにして、町の住居をなさんすなら、私が舞子を再びしても、また仕様もござんせう。また武士を立て通にせよ、忠義故にこの様な艱難すると思ふ時は、今の憂きを世に出て、昔語りにする事と、言ひ慰めつ、半七に力を付けて三味線持ち、どれ宵のうち、そこらをは、一遍廻つてこやうかと立ち上がる母親に、お通が目覚めて一緒にとり絶るを、色々と言ひ慰め、涙拭ふて立ち出る心の内こそ哀れなれ。○三勝が出てゆく跡へ、半七お通が跡追ふ故、やうく慰めれば、手遊びの箱の内より絵本取り出し、この様な本を宿屋の小母様に貰ふたと、見せびらかす画面は小栗判官が、片輪車の足腰立たず、それもその身につくくと思ひ合はせて嘆息し、胸差し詰まるその所へ、かねて親しき道具屋が、いつぞや売物に出し故、こなさんが買ひたいと言はしやつたる尊像を、この頃こへ逗留の客人、三十両に現が金で買はふとある故、その方へ気の毒ながら売り渡すと言ふ故、半七その品を他へ売られては、身にも命にも代へ難し。何卒しばらく日延べと言へども聞かず馳せ去れば、かく浅ましく浪々して、忠義のために三勝を、手に掛けんと思ひしに、それになまじい愛情に惹かされ、命永らへて、未練忠怯と言はるゝのみか、紛失の尊像の在処は知れても金調はず、あまつさへ人手に渡し、何面目に永らへんと、死ぬる覚悟をしながらも、我が亡き後に一筆と書き残すにも病故、手が痺るれば心に任せず。思ひ付いて娘お通に心の底を、一章の唱歌によそへ、口づから言ひ教えつ、もし今に母が戻らば唱ふて聞かしやと、よく言ひ含めれば、幼心に覚へつ、小聲に唱ふてゐるを幸ひ、こなたへ来たari脇差の下げ緒を口に銜へつ、左でやうく抜き持ちて、手拭に巻き、我が腹へ突き立てんとする所へ、三勝は戻り驚きて、コリヤ何故死ぬ事ぞ。それ程のことならば、なせ私には隠すぞへ。死なせはせぬと止むる故、半七は氣を焦り、委細のことはこのお通に教えおいたと取りなす刀の手元を止むるうち、隣(18ウ・19オ)座敷で逗留の客と見へて、弾き出すその三味線の音に幼子が、わしや書置といふ唄を、父さんに教わたつた。アノ三味線に合はせて唱ふぞへと言ふ故、母がヲ、早く唱ふて聞かしやと言ひながら止めるうちに、お通が唄「世の中にありて甲斐なき美濃の国、野上の宿の露霜と、消へなば立たん妻恋

て、やがて榮へを田の面の雁の悲し目出度く候かしくと、唱ふを聞いて三勝が、ソリヤ生きて、甲斐なき故死なふとか、いや殺さじと止むる所へ、一ト間の障子やにはに明け、飛んで出たる塵太夫、紙の肩衣、油紙の面を着たま、止めつ、はづみに面が落ちければ、顔見合はせて三勝は吃驚して、ヲ、父様かと驚けば、お通も爺様かと絶るに平三、孫娘半七も驚きて、三勝より聞き及ぶ、そんなら御身は平三殿か、これまで不思議に三勝や娘お通が養育の礼を述べつ、某は聞き及ばれてもあらん。永らへ難き身の上と、死なんとするを三勝が、悪者に引つ攫はれしを跡追つかけ、支へる奴らを暗がり故、相手もそれと判らねば、二人を手に掛けし故、鎌倉にもいられず立ち退く砌、お通が里親へ行きし所、昨日三勝殿と今一人、年の頃は廿三四の男がみへられ、お通を同道されたと聞き、もしや男は半七殿か、まづそれで安心と思ひながらも様子知れず。三勝二人が行方を捜し歩くため、また悪者でも二人を手に掛けたれば面伏せと、こんな姿に様を変へ、長谷の観音前を通りし、と立派な形の侍より弁当の余りを飯行裏へ貰ひし故、木陰へ寄つて遣はふと、中の飯を取り除ければ、内には百両包の封目へ、三勝の身の代金と書いてありし故、この如くと言へば、半七その事は若殿のため手に掛ける故、新十郎殿が計らつての金、かゝる繋がる縁ではあらじと、御身へ渡せしものなれば、落手あれと言ひければ、どうしてこの金を、俺が身に付けやうより、こなた二人が身のためにと百両を差し出せば、それにつけても紛失の尊像の在処は知れても人手に渡り、それ故死なんと覚悟を極めたり。暫時この金借り受けて、かの尊像を買ひ戻さんと喜びあふ門口より、思ひがけなき新十郎、件の尊像携へ来たり、俄に求むる者ありと、先刻道具屋が申せしは、かく言ふ某。何卒半七殿の在処を尋ね、手渡しせんと思ふ故、計らず(19ウ・20オ)門にて様子を立ち聞く。イザ貴殿へ譲らんと、聞いて半七三勝も嘆きが却つて俄の喜び、平三は百両のその内より三十両を分け出し、新十郎に渡しながら、尊像を半七に渡し、本にあなたは弁当へ、百両包を入れてくださつたお侍様。またもこゝにて半七殿があなたの義心のこの尊像、手に入るといふは御礼の程、言葉に申し尽くされずと、喜び合ふも道理なり。件の尊像手に取れば、半七が病氣も

早速に全快して、手足自由になりしかば、三勝平三が喜びも大方ならず。その尊像を持参なし、都にあつて時節を待ち、御家を窺ふ佞人を退けし後、某が推挙なさんと新十郎。半七夫婦平三お通、この暁に旅立ちて、花の都へ急ぎ行く。目出度し。く。く。く。く。

○この後の狂言は後編にお目に掛けます。ご評判。く。く。く。

松治郎画 兼吉作

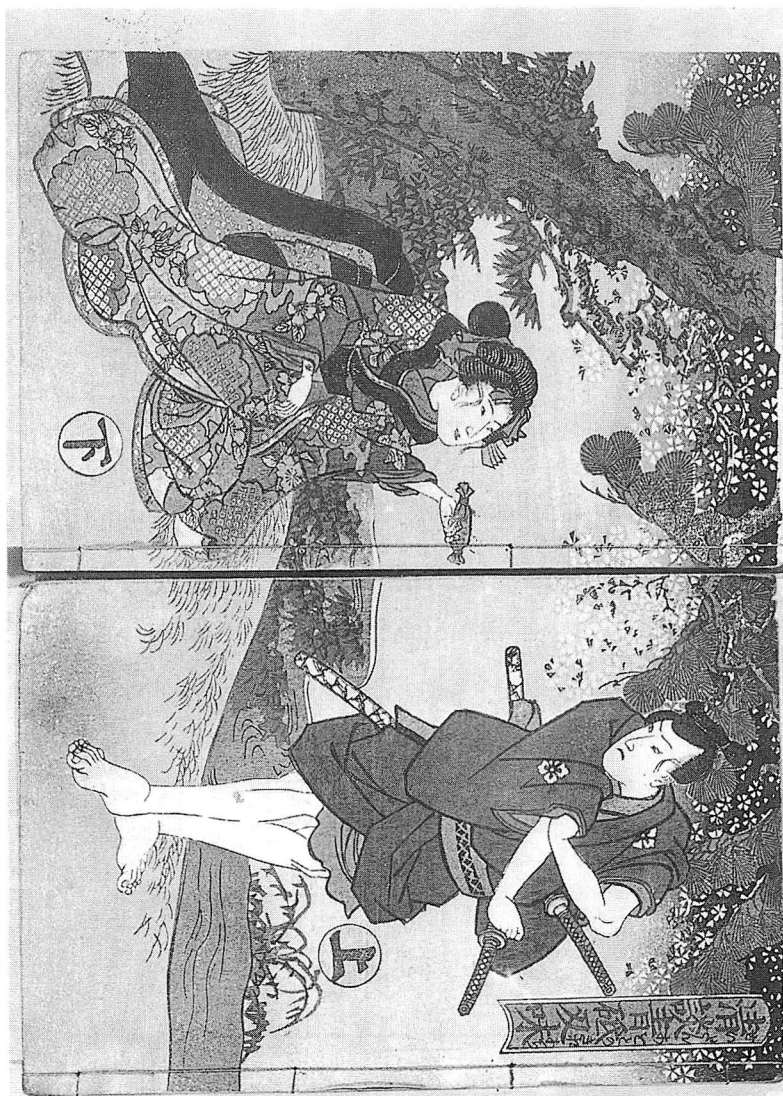
(20ウ)

御願一切 菊寿香 一包四拾八孔
美おしろい

世に多きおしろいとおなじからず私方にて製法仕ものは京都かまもとに同家御座候て別製の品に御座候間外々のものと御つかひくらべ下され御意叶ひ候は、御求め遊され下さるべく候御顔のきめを細にいたし色を白くすること御請合申候其余御顔のふきでも一切によし委しきことは包紙にあり

江戸てりふり町北側おやち橋入口 東花堂製

(下巻裏表紙見返し)



(表紙・上下)

弘化四丁末春新輯

和堂山人



一日僕吉成の俳優小忽の感も、彼本文を依りてまじふ。
 涸川の深くも不根絶は六文、人知三丈、知無もけり。
 柳史、緋の白貫の松明、照生と何ぞ和漢の書ふらる。
 車は得じ。戯れ、悪き言ふ善行、さといふ勸懲、さうさる。
 形。見よ者、さうさる。六櫛の齒、引くさうさる。漸
 けり。望むの土問、人へる。事、得る。然、是と。
 腕、さうさる。銅、年々、吉成、さうさる。藤、網
 の、さうさる。繁、さうさる。其、修、さうさる。み、付、さうさる。
 其、助、さうさる。培、さうさる。咲、者、さうさる。水、ぬる。



一勇齋國芳画
 和堂珍海作

清談
 青砥双味

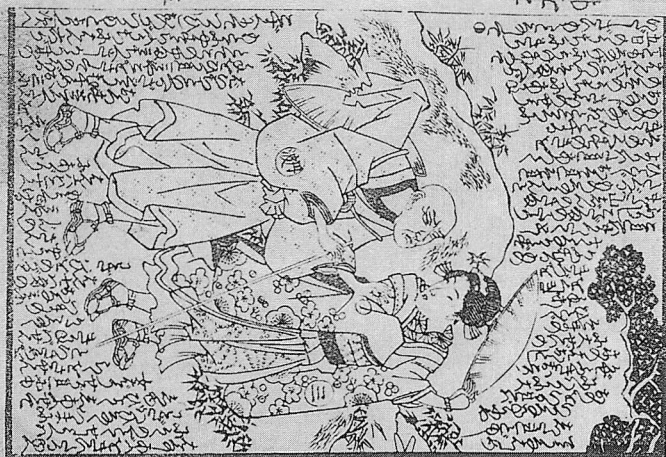
弘化四丁末春新板

(見返し・1才)

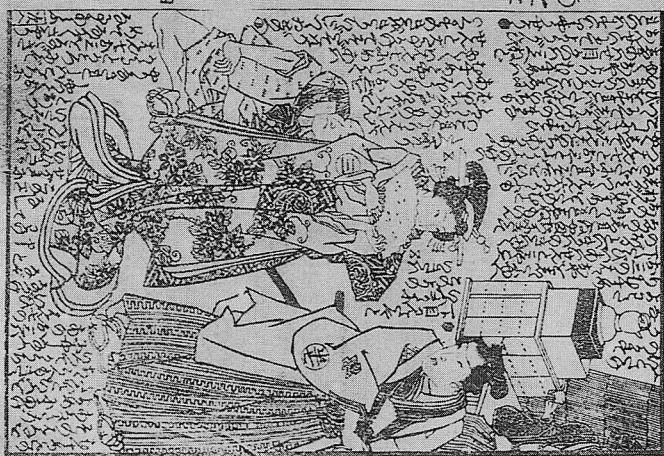


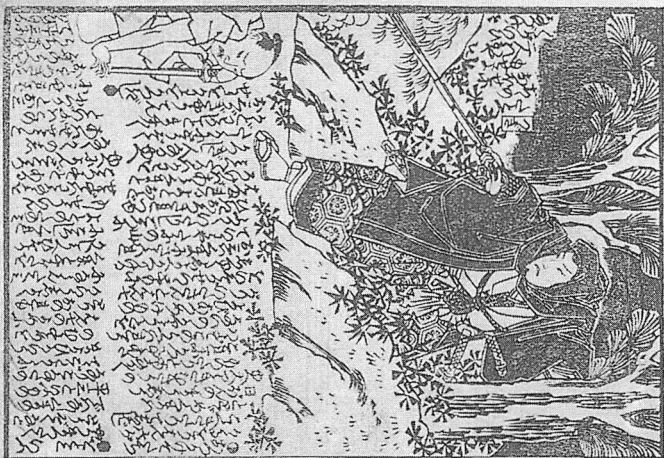
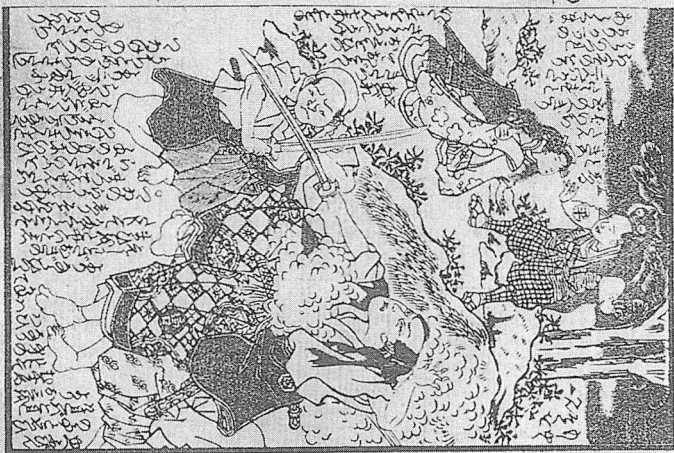
(1ウ・2オ)

(27・3才)

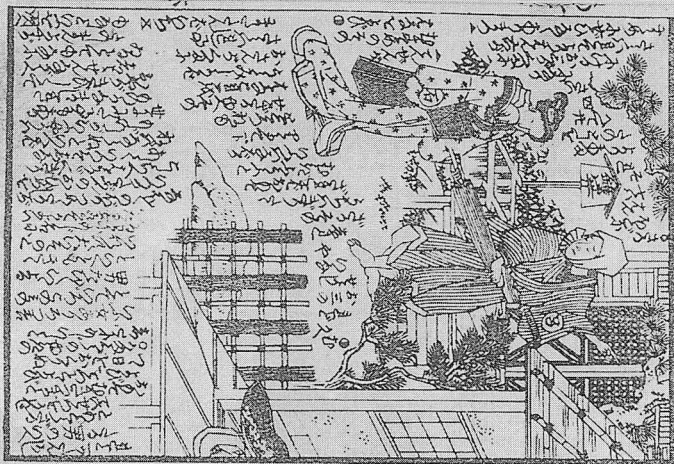


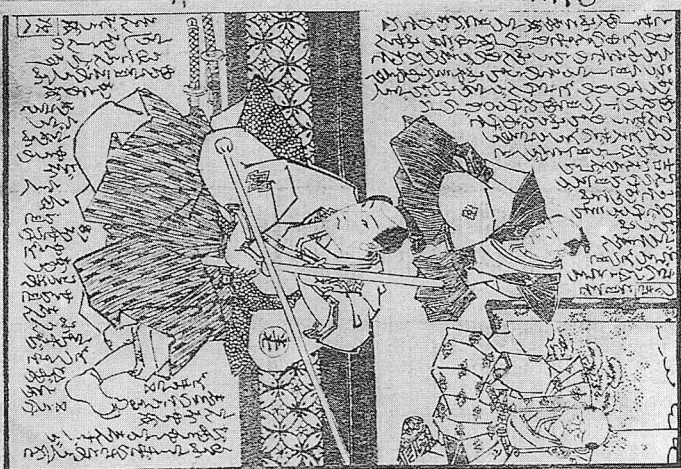
(37・4才)



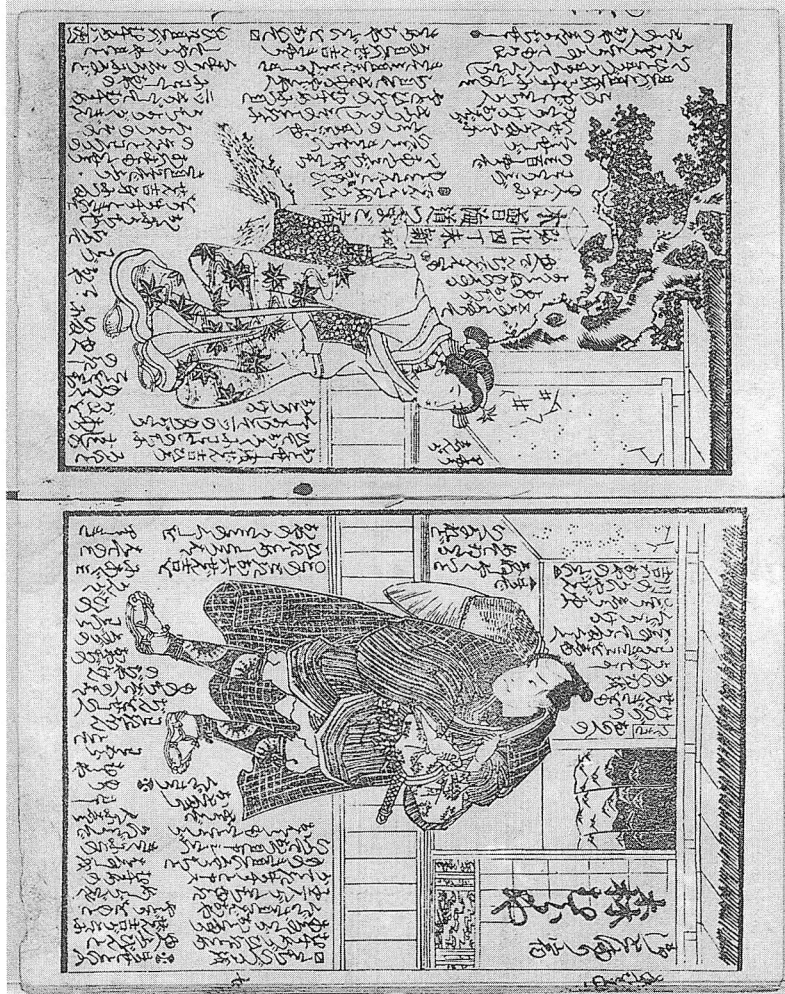


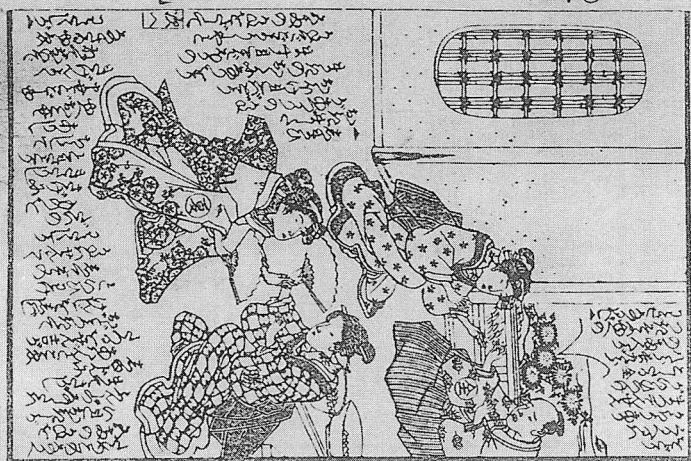
(57・67)

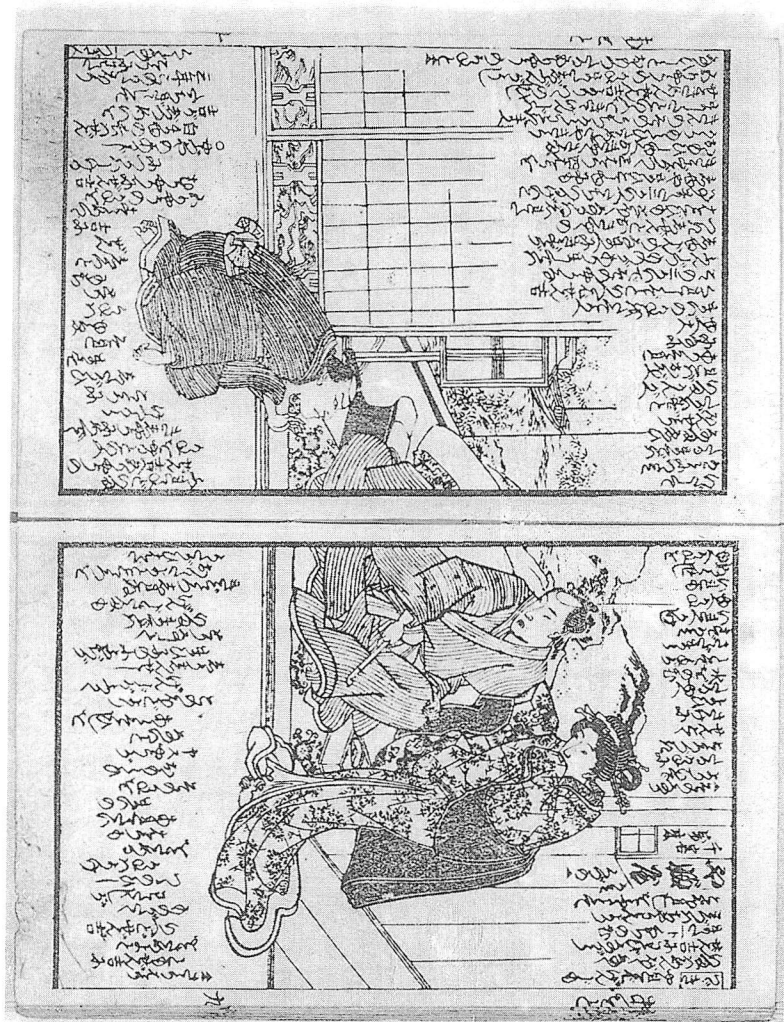


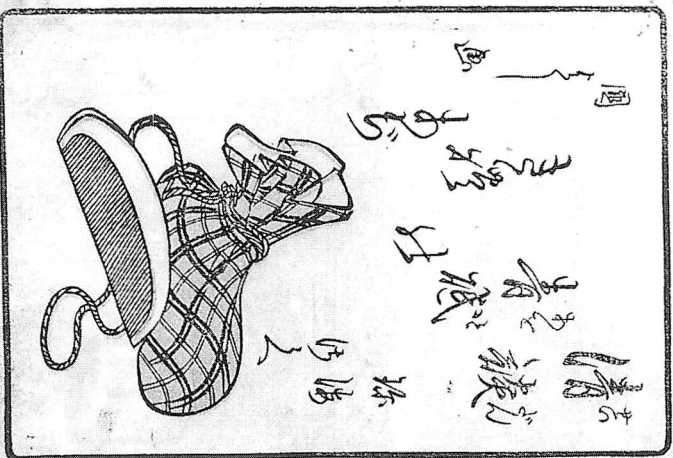
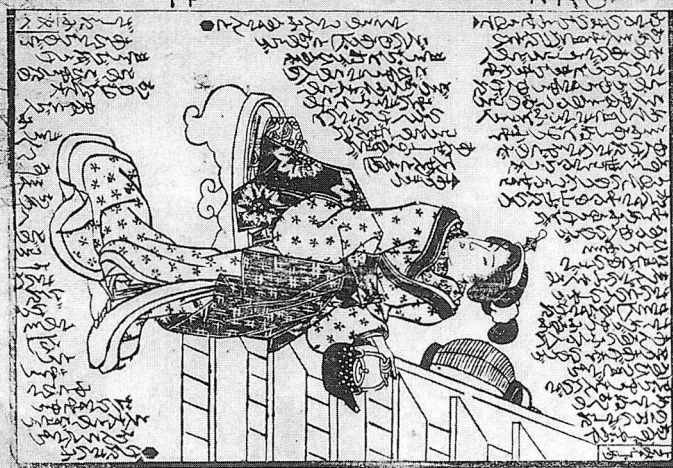


(77・84)

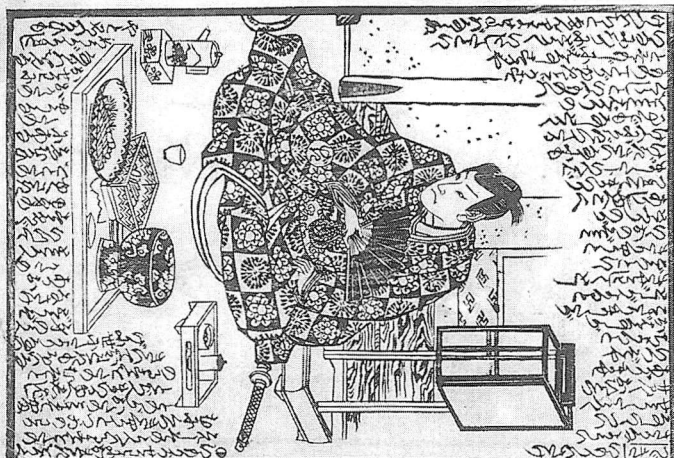


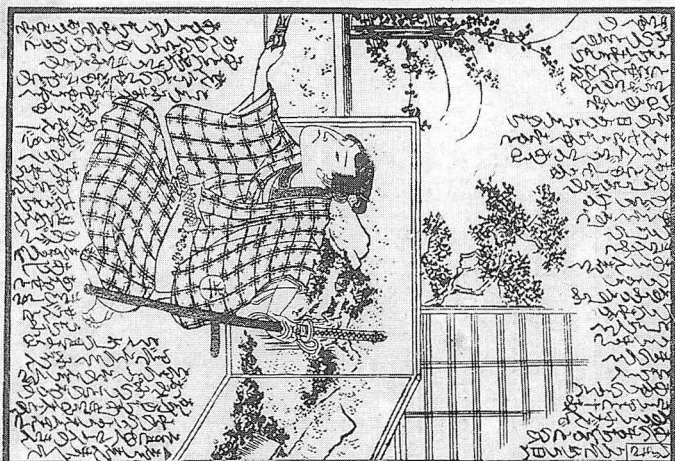
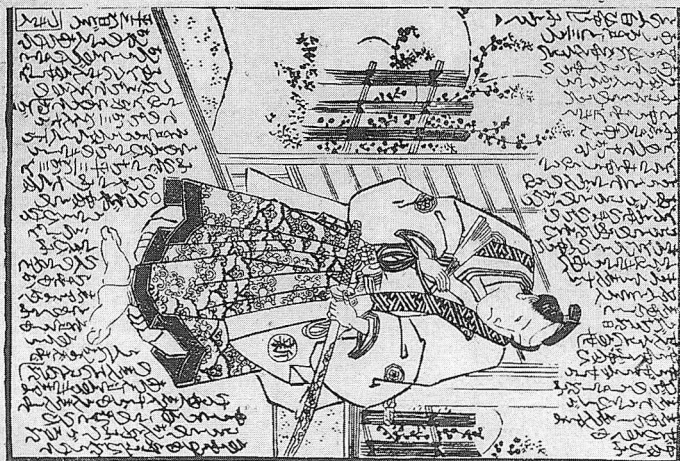


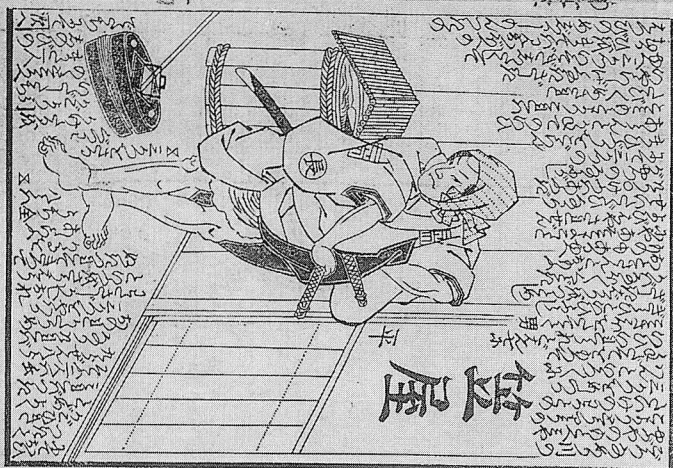




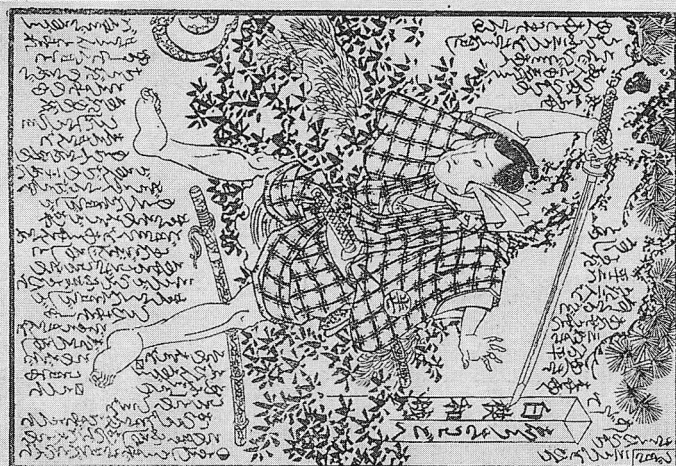
(下巻見返し・11才)

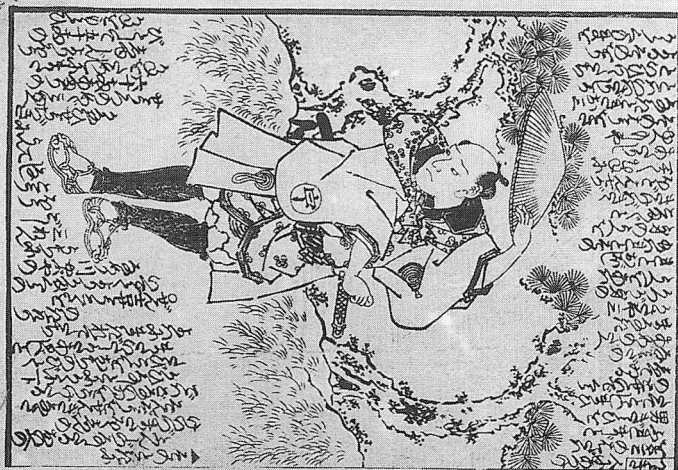




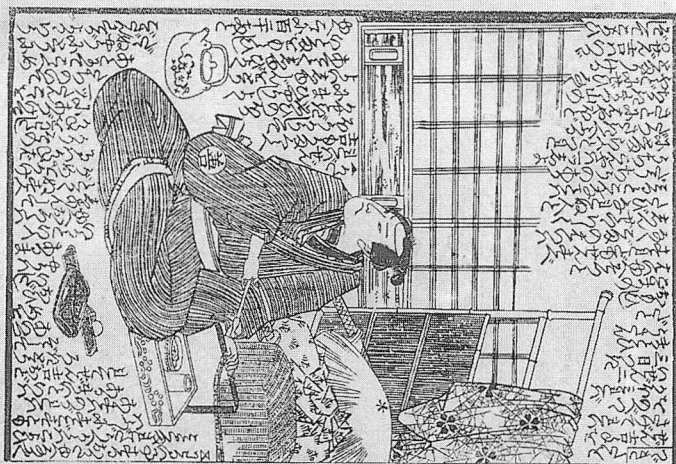


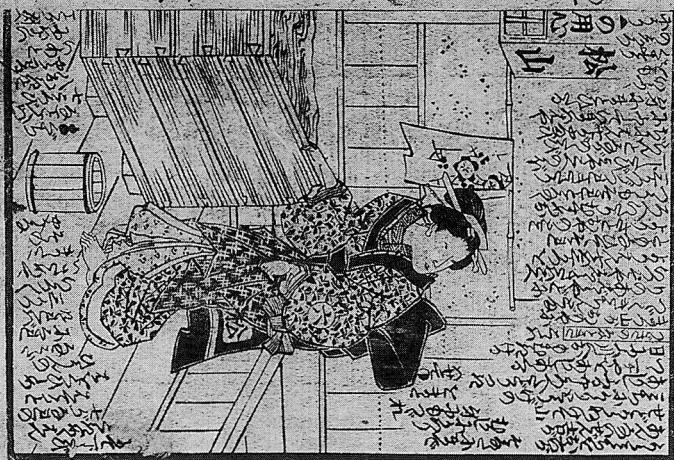
(14ㇿ・15ㇿ)



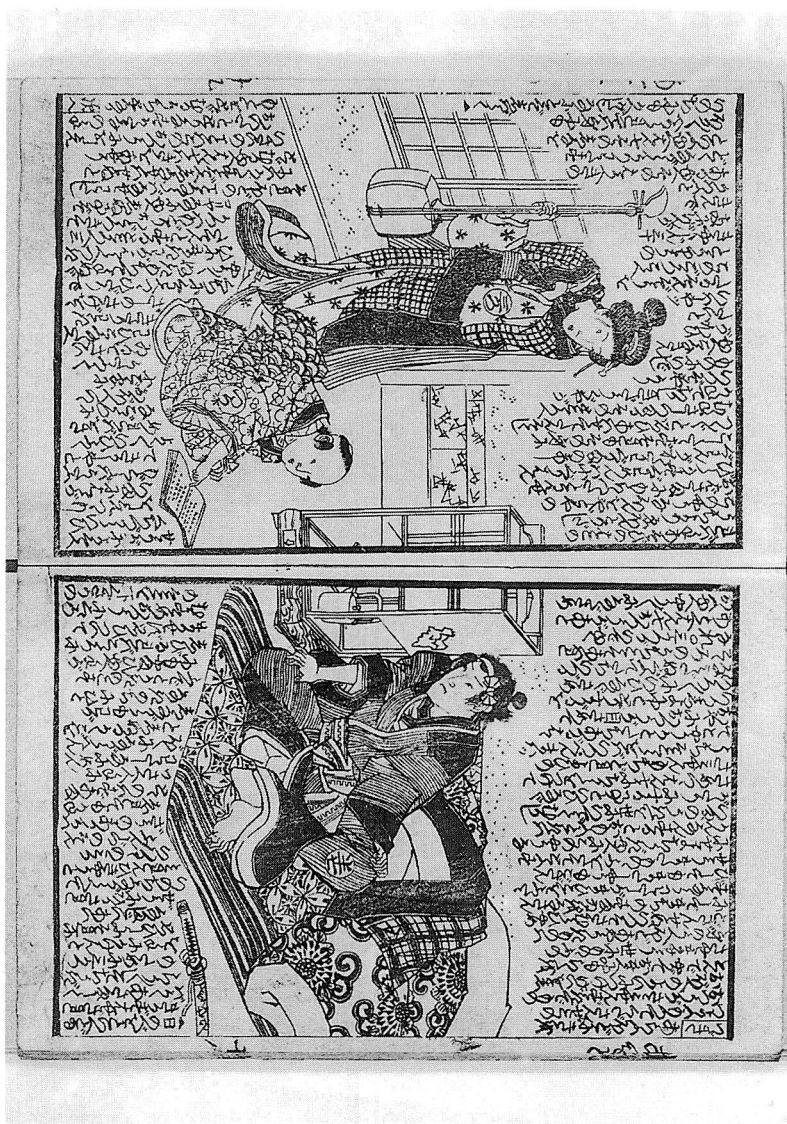


(167・174)

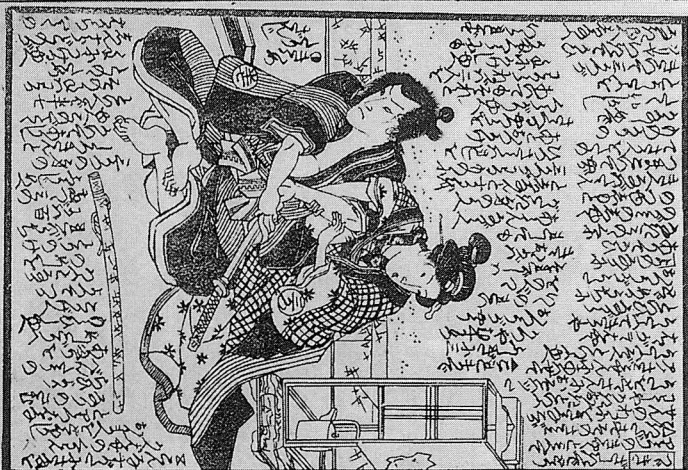




(187・197)



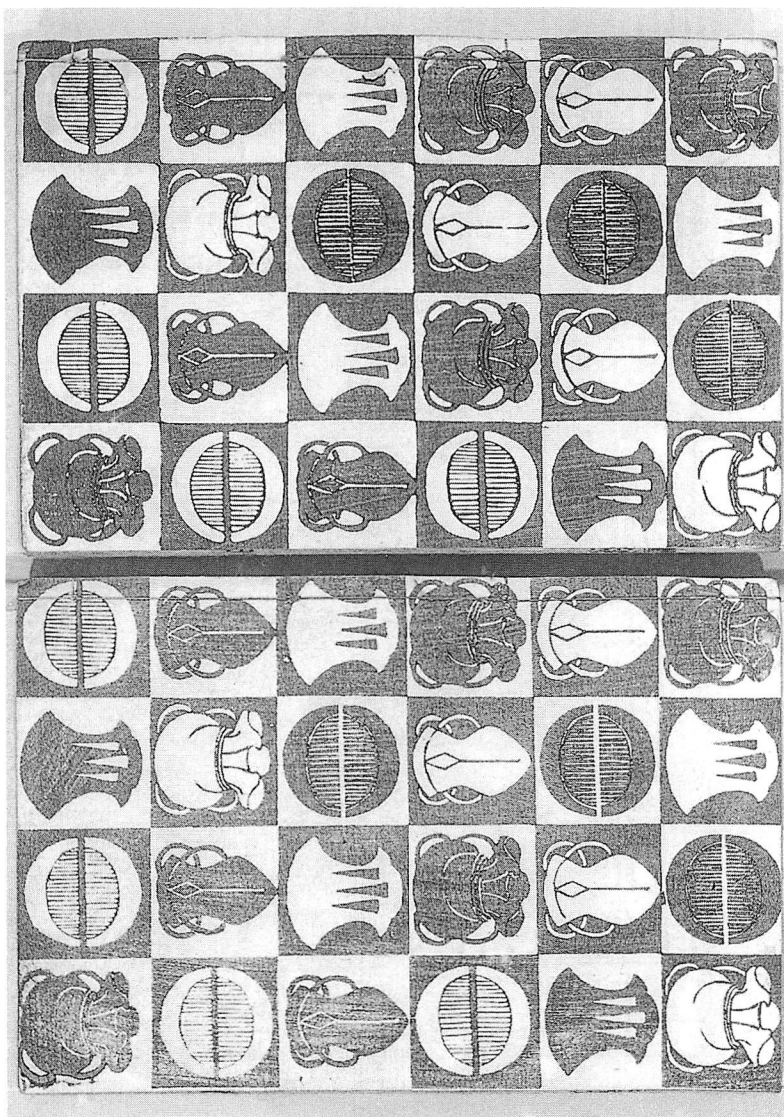
(197・207)

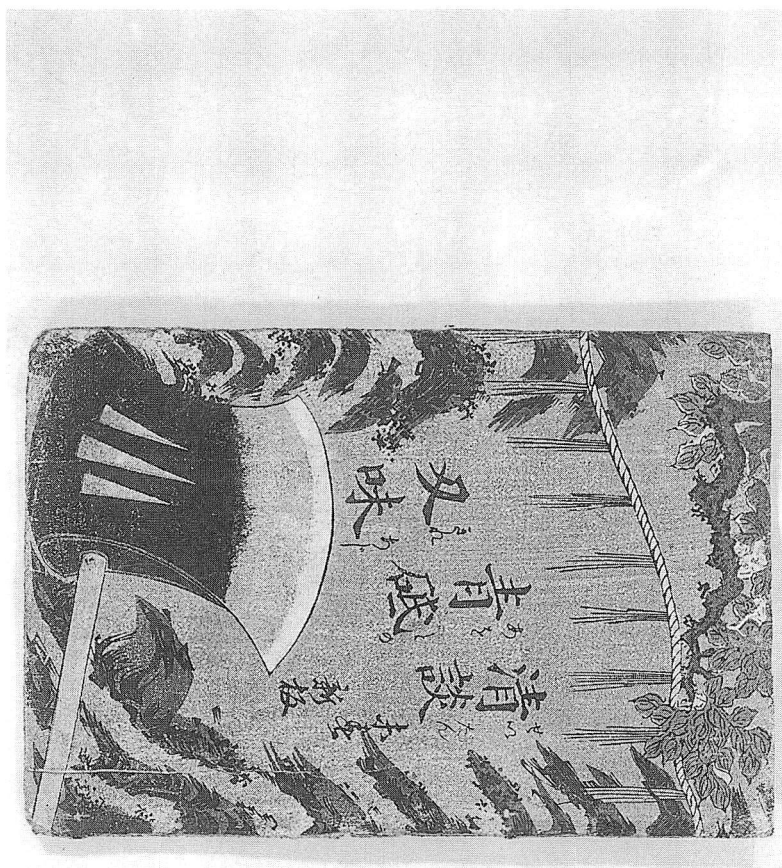




(207・下巻裏表紙見返し)

(上下巻裏表紙)





(袋・表)



(袋・裏)